

ムキタケの

原木栽培

伊 東 英 武



シラカンバに発生したムキタケ

天然のムキタケは、晩秋広葉樹の倒木や根株などに群生して発生する汚黄色で、長径が10cm以上になる大型のきのこです。

林産試験場ではシイタケ、ナメコ、ヒラタケなど、栽培が普及しているきのこについて品種と栽培技術の改良を進めておりますが、同時に、人工栽培できるきのこの種類をふやそうと、いろいろな野生きのこの栽培をこころみつつあります。そのなかでムキタケは、子実体が発生しやすく、栽培できる見込みがたちましたので、これまでに得られた成果のうち原木栽培の一部についてお知らせします。

ほだ木の原木には、シラカンバとシナノキを使い、のこず種菌を57年春、長さ90cmの原木を約1カ月水ぬきして植え込み、封ろうを塗布しました。植え穴（径10.5mm、深20mm）の数は原木直径の約2.3倍です。

植え込み後、裸地で棒積みムシロがけして1カ月仮伏せし、6月中旬にしゃ光率95%のネットを張った人工ほだ場に本伏せしました。伏せ込みの

方法は、ムキタケの自生環境からみて、高水分が必要と考え、地面に直接横に並べる接地方式としました。

こうしてほだ場の環境が、晴天続きで乾き過ぎるときには、適宜散水してやりながら、観察を続けますと、7月下旬シラカンバの木口に菌紋があらわれ、シナノキよりシラカンバで菌糸生長が活発であるように見受けられました。事実植菌6カ月後に調べた種菌の活着率とほだつき率（はく皮したほだ木の全表面積に対するムキタケ菌糸がのびた面積の比率）をみても、表1のように、シナノキは遅れていましたが、シラカンバのほだつきは大変良好でした。

ついで10月上旬には、予想よりも早くシラカンバにムキタケが出はじめ、約1カ月にわたって採取できました。また、58年秋まで2年間の収量は表2のような成績になっています。子実体1個の平均重量は17g、親指大の小さなものから、径が15cmをこえる大きなものまで、写真のように重なり合って発生しました。

表1 活着率とほだつき率
(植菌後6カ月目)

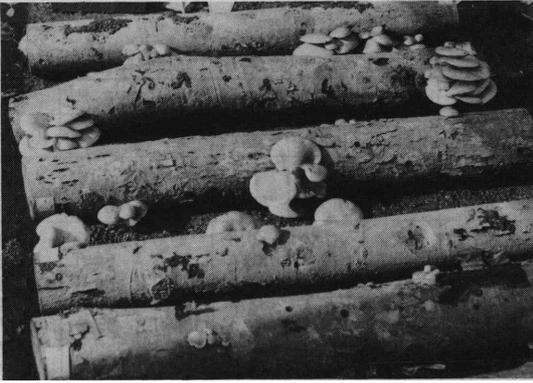
樹種	活着率(%)			ほだつき率(%)	
	(+)	(±)	(-)	表面	断面
シラカンバ	96	4	0	78	78
シナノキ	98	2	0	10	6

ほだつき率：剥皮ほだ木2本の平均

表2 ムキタケの収量

樹種	1年目		2年目		合計		発生ほだ木数(本)
	(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)	
シラカンバ	206	3,267	139	2,550	345	5,817	28
シナノキ	9	190	179	2,827	188	3,017	9

供試ほだ木 各30本



シナノキに発生したムキタケ

ムキタケの採取適期について、今回の試験ではひだの色が変化したとき、あるいは束生した株のなかで大きいものの径が10cmをこえたときとしました。採取の時期を逸すると味がつくようです。

ムキタケは、植え穴、節のまわり、木口、原木の伐採から伏せ込むまでの作業でついた樹皮のき

ずから発生しますので、原木にあらかじめな目を入れる必要はありません。

シラカンバとシナノキをくらべると活着率は両方とも非常によく、植菌した年の秋に走り子が出る点で、シラカンバの方がつかいやすいといえますが、シナノキも2年目の秋には多量に発生しますので、どちらでも栽培できます。ただしシナノキはほだ木の乾きが目立ち、伏せ込み環境の湿度調節をこまめにしてやる必要があります。表2の発生ほだ木数からわかるとおり、シラカンバは全般に失敗が少なく、シナノキは菌糸のまん延が進んでほだ化がうまく行けば、2年目から一気に発生します。

ムキタケの原木栽培には、まだほだ木一代の収量、つくりやすい品種の選抜、きのこの品質などの問題が残っています。しかし白く厚いち密な肉質をもち、特有の歯ざわりがある野趣ゆたかなきのこですから、いろいろな料理にむいていると思います。
(林産試験場 特殊林産科)